

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 158号

平成27年6月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (7)

キリスト教はパウロの啓示の中に起こった

最近使徒行伝を研究している。使徒行伝の中ではパウロの大説教が中心である。啓示というものはある偉人に与えられるもので、正にパウロはそれを与えられた人である。私はキリスト教はあの啓示の中に起こったものと解する。

啓示の中心点は 26 章 16～18 で、殊に「彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるためである」が中心である。新口語訳では「わたしを信ずる信仰によって」が聖別された人々にかかるが、文語訳では「我に対する信仰によりて罪の赦しと潔められたる者のうちの嗣業とを得しめん」と「得る」にかかる。英、独、ギリシア語からしても文語訳の方が意味ある。ここにパウロの originality がある。

私は福音の真理はパウロに授けられたのであると思う。「私を信じる信仰によって天国の一員となる」ということが最も重要な点であり、この真理はパウロに授けられたものである。神の真理は個人に与えられる。私達といえども個人である。従っていつどんな真理を与えられるか分からないのである。だから個人は尊重されねばならないのだ。

(昭和 35 年 10 月 21 日 金曜会)

尊敬する人物

同感！ 尊敬する人物は必要である。それに似る。私は源信が好きである。「往生要集」を読むと悲しい時も苦しい時も力づけられる。親鸞は念仏は無碍の常道と言った。しかして洋の東西を問わず古今の友を見出すのは、これは重要なことである。但し、宗教はどれでもいいというのではない。偉人は自分で苦しみを解決してきている。古典はすぐれている。古今東西に友を求め、世の尊敬する人物が出るといい。

(昭和 35 年 10 月 21 日 金曜会)

金沢常雄先輩

金沢常雄先輩（大 7）は私の 2, 3 年先に卒業された。2 年間内務省の役人をして牧師となられた。北海道に数年おられた。その後独立伝道された。昭和 2 年から独立された。収入もなく内村先生の弟子として最も苦勞され、無教会の良心であると言われた。30 人以上の集まりはなかったと想像するので奥さんも苦勞されたろうと思われる。

内村先生の信仰がもっとも純粹に受け継がれているのは金沢先生であろうと思う。最も近しく感じていた。夏期講習会に私も参加し可愛がってもらった。ああいう信仰が同志会内にあったのは感謝である。金沢常雄先輩が来阪され私宅へ泊られたのもこの間のようにある。

（昭和 35 年 10 月 21 日 金曜会）

毎日のことを真剣に取り組め

塚本虎二先生は説教を一行にまとめるが、説教内容を一行でまとめることのできる人は達人と言うべきだろう。何か一事をなすことのできる人間になりたい。パウロの如く与えられたものをやり遂げること、一つのことをやり遂げた人間、自分の前におかれたことを誠心誠意行うがよい。パウロも初めは伝道をしようと思っていなかったのではないか。手に落ちてくることをいやがらずにやるがよい。毎日毎日のことを真剣に取り組め。その累積が「一つのことをやり遂げた」と言いうる人間にするのだ。日々死す。誠心誠意ことにあたる心構え。私は少時私の姉より毎日学校で習ったことを復習させられた。これが現在と無関係ではない。つまり手に入れたことを真面目にやってきた。「俺はこれこれのことをやった」という人生を送ってもらいたい。そのために日々真剣に誠心誠意ことにあたるべきだ。

(昭和 35 年 11 月 4 日 金曜会)

自分のできることをやったらよい

ヨハネ伝 3 章「すべてこれを信ずる者は永遠の生命を与え給う」と書いてある。「私を仰ぎ見、あがめる者は救われる」イエスを見上げればよい。「主の名を呼び求める者は救われる」と書いてある。だから諸君に言いたいことは、どちらでもよい、主の名を呼び求めるもよし、イエスをあがめるもよい。仏教でも同じような主旨を言っている。感無量！ 自分の家が浄土宗であったから接することが出来た。

It is possible for everyone. 自分で出来ることをやればよい。主を呼び求めてもよい。イエスを仰ぎ見てもよい。聖書に書いてある通りやったらよい。そのように権威があるわけである。もしそうやって永遠の生命を与えられなかったなら、それは聖書に、主に、神に罪があるわけであろう。その危険を冒して信ずることが信仰である。人の言うことを信ずることを信仰であると私はそう思う。

(昭和 35 年 12 月 2 日 金曜会)

良い本を1冊よく読め

波多野先生がよい本を1冊よく読めと言われた。孔子の言ったように、人生を知っているより、人生が好きである、人生が楽しいという方が本物である。ベートーベン「苦しみを通して楽しみへ」と言った。パウロの行ったように“聖霊の結ぶ実は仁愛、喜び”これらのものがない人は聖霊を受けていない。パウロ“常に喜び常に感謝せよ”これらの者のない人は聖霊を受けていない。パウロ“常に喜び常に感謝せよ”パウロは自分に出来ないことをすすめるはずがない。

(昭和36年2月17日 金曜会)

聖書なり、注解書なり 1冊をがっちり読め

聖書なり、注解書なり 1冊をがっちり読め。聖霊が身に満ちて平安を得る。イエスの平安は父の元へ帰るということであった。この世の平安ではない。君らもやり始めたのだから無駄にせぬように一冊、聖書を読め。貧しく名も無くて人生は好きだと言えるように、我々も言えるような力をキリスト教は持っている。ワタクシチャンにならぬよう。力がありすぎるとかえっていけない。

結論を言えばキリスト教の目的は、“罪と死から救われて永遠の生命を得る”ことである。“義とされる”“この曲れる世より救い出される”。永遠の生命を得て初めて名もなく貧しくても平安である。偉大なる仕事も出来る。どうかそのような信仰を得て欲しい。教訓よりも実績がベターである。

(昭和 36 年 2 月 17 日 金曜会)

内村先生仕込みの信仰

署名式の際は大阪へ行って留守だった。9人の兄弟方には初めてお目にかかる。おめでとう。今日は「内村先生から学びしこと」と題してお話ししたい。私は白山教会に属していて洗礼を受けたのが大正7年。その年、時あたかも内村先生が柏木から再臨運動のために中央に出て来られた。初めは日曜の午後YMCAで講演を聴いていた。翌年から午前になり市立衛生会館に移った。私が一高1年の時からだから大学3年まで5年間毎日曜日聞いた。内村先生仕込みの信仰である。今私の属しているのはキリスト教団の教会であるが、しかも内村先生から教わった信仰を堅持していきたいと思ってあの小さな教会をやっている。先生は1861年、東京で生まれられた。旧2月14日、今日の3月23～24日にあたる。今年が生誕100年にあたる。そこで私の教会で「内村先生から学びしこと」と題して話をした。

(昭和36年4月28日 金曜会)

キリスト教の救いとは、限りなき生命

先生から教わったことの第1、キリスト教で救いとはどういうことをいうか。それは一言で言えば「限りなき生命」である。

「われら土に属する者の形をもてる如く、天に属する者の形をもつべし」(コリント前書 15 章 49) とある。これがパウロの信仰だ。かかる永遠に朽ちざる体を得ることこれを救いと言う。この 50 年 70 年の肉体のうちに霊体のたねを受けてやがて復活のあかつきは永遠無限の体を頂く。これが救いである。パウロのようにこれをはっきり言っている者はいない。この生命ありと分かった時にこの 50 年、70 年は何でもない。われらもし 100 年しかなかったらその 100 年、人のために働けと言われても出来ない。永遠無限の生命ありと知った時、どんな報いのないことでも、どんなにほめてくれる人はなくても、この 100 年の人生何でもすることが出来る。分相応に働かせてもらえるのである。諸君も救いを浅く薄く見たらダメですよ。

(昭和 36 年 4 月 28 日続き 金曜会)

救いをどうしたら受けられるか

第2、その救いをどうしたら受けられるか。これは先生のロマ書講義で聞いた。「神の義が律法と別にあらわされた」（ロマ書3章21）我々の律法道德とは無関係にと先生は訳された。神はイエスの十字架を用いてそれをあらわされた。我々がいかに信仰薄くとも律法道德——pious（信心深い）な信仰深いことも含めていいと思う——そんなものとは無関係に神はそれをあらわされた。それを聴いて、私は誰でも救われるのだなとわかった。

（昭和36年4月28日続き 金曜会）

俗事と伝道とは同じ価値

第3、永遠の生命をもらって復活することになった以上は、この世の仕事は何も同じだ。俗事でも伝道師も同じである。これはルターが言った。だから内村先生のお弟子は皆社会へ一度出た。黒崎、矢内原、塚本、ここの金澤先生だってそうだ。私は5年間聞いたが、先生は一度も伝道師になれとは言われなかった。すでに一高を出る時私は伝道師になると宣言していた。「お前は官吏、お前は実業家になれ。おれは伝道師になる」親は猛烈に反対した。大学を出て文官試験に合格した。私が弱かったこともある。この世に未練があったこともある。しかし肝心の先生が勧められなかったことが一番である。先生から俗事と伝道とは同じ価値なりと学んだ。

(昭和36年4月28日続き 金曜会)

福音は福音の分かった人から聴かねばならない

第4、福音は福音の分かった人から聞かなければならないということ。聖書はいろいろに解釈できる。いわば外国語みたいなものだ。人間の思想ではない、天来の思想だから。英会話だって英語のできる人から習わないと分からない。この間外国人から専攻を訪ねられて zoology と答えるのが外国人にはわからない。あれはズーロジイではない。ズーオロジイだ。それでやっとわかる。キリスト教の救いも同じだ。キリスト教倫理と言うのは同じように一生懸命勉強していても両者は根本的に違う。自分のためだけにしているのか、それとも永遠の生命をもらったものとしてそれをしているのかそこが根本的に違うところ。ズーロジイとズーオロジイの違いだ。これが先生から学んだ第4のこと。先生は浄土宗を悪く言われる。しかしそれは先生の理解が浅いか、先生の学ばれた人がよくなかったからだろう。浄土真宗に関する限り私は先生と見解を異にしている。一度このことを天国に行ったら先生とゆっくり話したい。内村先生の偉大をもってしても、先生の聞いたことに誤解がある。良い先生から聴くことが必要だ。一度これらのことを内村先生の記念会で話して見たい。

(昭和36年4月28日続き 金曜日)